

2022年 早稲田 算数（第1回）

各年の思考コード別出題割合は次のようになります。論理的思考力・応用力が求められる思考コード B の問題を中心として出題されます。2022年は、2021年の出題とほぼ同じ構成でした。B2、B3の出題割合は、ほぼ変わらず、例年通り骨太な問題が出題されています。比を自在に使いこなす力、もれや重複なく調べ上げる力、変化する状況を適切に具体化する力が求められます。50分で解き切るのはとても厳しいため、問題の取舍選択が重要となります。



大問1は、例年と同じく、一行題の構成でした。(3)で手が止まった受験生が多かったと思います。AとBの濃度、AとBを混ぜた濃度がわかっているので、面積図、てんびん図などに置き換えることで、状況がとらえやすくなります。A、Bそれぞれの重さを③、②と置いても、また、300g、200gのように実数で置いて考えてもよいでしょう。大問2も、例年と同じく図形の問題が並びました。(1)は、確実に得点しておきたい問題です。(2)は、三角形ADFと三角形ADGの面積が等しいので、DFとAGも等しくなることがポイントです。(3)は、展開図にして考えることがポイントでしたが、題意が捉えづらかったため、後回しにする方がよかったと思います。大問3のニュートン算は、類題を経験したことのある受験生も多かったはずで、確実に得点しておきたい問題です。大問4の時計算は、(1)と(2)(3)で問題の特徴が異なります。(1)Aは8でわると6余る数に注目して、6時、14時、22時のどれかとなります。一方、Bは1時、4時、7時、…と、3でわると1余る数の時刻となるため、22時とわかります。数に注目する問題でした。(1)を確実に取り、(2)まで取ればよいと思います。大問5は、頻出分野の立体の切断でした。(1)は確実に取っておきたい問題です。(2)は、2回切断となりますが、早稲田を志望する受験生であれば、類題に取り組んだ経験はあると思います。難関校で見られる2回切断と比べて、切断状況はとらえやすいため、得点しておきたい問題となります。

例年通り、高い応用力が求められる問題構成でした。そのため、確実に得点しておきたい問題を落としてしまうと、大きな差が生まれてしまいます。比の利用、平面図形、立体図形など、頻出分野があるため、過去問に取り組んでおくことは、非常に有効であると言えます。あくまでも予想ですが、大問1(1)(2)、大問2(1)、大問3、大問4(1)、大問5(1)が取れば、およそ半分に達することができると考えられます。後は、大問2(2)、大問4(2)、大問5(2)(3)でどれだけ取れるかがカギとなります。